小麦づくりのポイントⅢ　越冬前

５.越冬前の準備

■**雪腐病防除**

・融雪水が停滞しないよう、排水性改善
　└根が窒息死する
・根雪直前に防除(茎葉散布)　・融雪剤の散布
・種子消毒

上写真　雪腐病の被害
「健全な葉が全くみられない」

左写真　融雪剤の散布

右写真　融雪後の滞水状況
「表面水が速やかに排除されないと減収につながる」

小麦づくりのポイントⅣ

６.雑草対策

・除草剤を使う場合は、雑草の種類に応じた除草剤を選択し、適期に使用基準を守って実施する。
・秋の除草は種直後散布　または　小麦の２～３葉期散布
・春の除草　麦の幼穂形成期ころに散布

小麦の生育期と除草剤の使用時期

雑草の種類	は種１ケ月前	は種後	麦２～３葉期	幼穂形成期
多年生イネ科雑草優占（シバムギなど）	○	○	—	—
1年生イネ科雑草優占（スズメノカタビラなど）	—	○	—	—
1年生イネ科・広葉雑草混在（スズメノカタビラなど）	—	—	○	○
1年生イネ科・広葉雑草混在	—	○	—	○

レッドトップ

スズメノカタビラ

イヌカミツレ

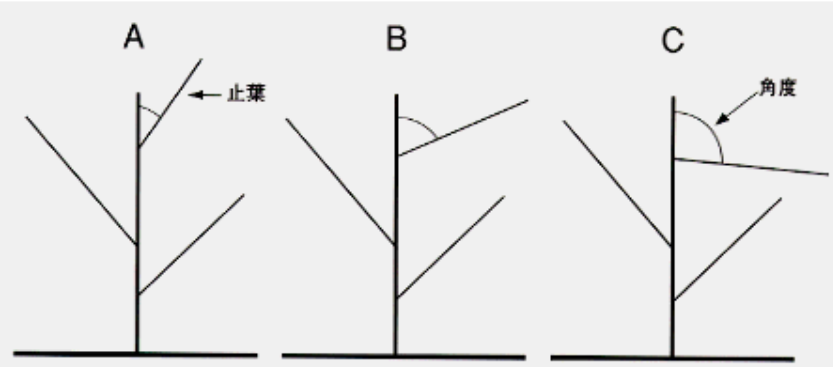
広葉雑草が繁茂した状況

小麦づくりのポイントⅤ　融雪後～

７.窒素分追肥　収量アップに不可欠な技術

・ホクシンは多肥の場合、子実蛋白含量が高まり粉色が暗くくすむ傾向にある。また、桿質も軟弱で倒伏し易くなるため、細心の注意が必要。
・前作物、生育状況、ほ場条件や葉色をみて分追肥の要否を判断する。

止葉期の草姿と分追肥の可否



項　目	A	B	C
止葉の形	堅く、狭い	やや幅広く、柔らい	幅広く、柔らい
止葉の色	黄緑	緑	濃い緑
止葉の角度	≒45度	≒70度	≒120度
分追肥の可否	できる	やや危険	できない

ホクシンの分追肥例(kg/10a)

生育期節 / ほ場区分	起生期	幼穂形成期	止葉期
一般的なほ場	4～6	0	3
		又は	
	3	3	3
子実蛋白の高まりやすいほ場	4～6	0	0

写真　多肥により倒伏した麦畑

小麦づくりのポイントⅥ　止葉・出穂・開花期

８.病害虫対策

・赤さび病、うどんこ病、赤かび病、縞萎縮病、アブラムシ

赤かび病(左写真)
・穂の一部が褐変し、桃色の粉状のカビを生じる。
・降雨・曇天が続くと多発
・検査規格
　かび毒(DON濃度1.1ppm以上)で出荷不可となる。

赤さび病
・葉の表面に赤褐色の粉状の小斑点ができ、葉全面が赤褐色の粉をかけたようになる。
・高温多湿に経過すると多発し、減収する。

縞萎縮病(上写真)
・融雪後、退緑した斑点が現れ、後に黄白色縞状になる。
・土壌伝染性のウィルスが媒介(土の移動により拡大)。
・耐病性品種。排水を良くする。連作、短期輪作を避ける。土壌の移動を避ける。
・発生地：美幌斜里女満別清里小清水

アブラムシ
・春から初夏は葉の下面に寄生吸汁し、出穂後は穂に移動して、小穂の間に密集し加害。
・高温・乾燥で発生が多くなり減収。

写真　出穂期での防除

小麦づくりのポイントⅦ　収穫期

写真　穂発芽

９.収穫・乾燥・調整

・出穂40日以降に子実水分を測定し、35%以下から試し刈り
・30%以下になったら本格的に収穫
・倒伏や雑草繁茂は水分が低下しにくく、刈り遅れる。
・成熟期後、収穫前に降雨があると、穂発芽・低アミロ化による品質低下を招き易い。
・高水分のものは、穀温40℃以下で二段乾燥。18%程度まで下げて一次貯留、仕上げ乾燥で12.5%とする。

搬出～乾燥調整施設へ

自脱型コンバイン

普通コンバイン

ロールベーラ

春まき小麦の特性

植物学上の分類	イネ科の１年生
原　産　地	中央アジア・コーカサス地方
用　途	パン用

←芒（ぼう）

春まき小麦の穂

秋まきよりも芒が長い

写真　春よ恋

Ⅱ所得目標

収量	400kg／10a
単価	157円／kg
粗収益	62,827円
肥料費	8,623円
種苗費	4,032円
農薬費	1,923円
直接費計	29,725円
粗所得(円)	33,102円
労働時間	1.48時間

Ⅰ収量目標

土壌区分	kg/10a
低地土	330～400
泥炭土	330～400
火山性土	330～400
台地土	330or400

Ⅲ品質目標

●タンパク含有率：１２％以上
●粉の明るさ：明るいほうが望ましい。

春まき小麦のポイント

１.特徴

■秋まき小麦に比べ栽培期間が短いため収量が低い→播種が早いほど多収になる。
■春に播種し８月収穫のため輪作体系に組み入れることが容易。
■秋まき小麦と同様に他畑作物に比べて省力的。
■市場の需要に対して供給量が不足している。
■気温が高めに推移すると登熟期間が短縮して減収する。冷涼多照で多収となる。

２.栽培のポイント

■可能な限り早まきをする
　融雪剤散布、融雪水の早期排除、排水促進(心破)ほ場を乾かす
■ほ場のpH(H2O)は、5.5～5.7程度とする。
■倒伏すると穂発芽して品質が低下→倒伏しないよう施肥量やは種量は適正にする。
■播種期　４月中旬遅くとも末までに
■播種量　１２kg/10a
■防除　　秋まき小麦に準ずる 赤かび病に特に注意
■収穫　　秋まき小麦より２週間ほど遅れる
　　(８月上中旬)

施肥量　　（単位:kg／10a）

土壌区分	窒素	リン酸	カリ
低地土	7～9	12	7～8
泥炭土	6	12～15	8～10
火山性土	8～10	15	8～10
台地土	8～10	15	8～10

小麦の新たな栽培法Ⅰ

１.秋まき小麦の大豆間作栽培

■大豆の畦間に秋まき小麦をばらまき播種し、次の年に収穫する方法。
■輪作体系に組み入れるのが容易になる。砕土整地がなくさらに省力的。
■栽培のポイント

播種期：９月上旬　播種量：15～20kg/10a　施肥：前作の収穫直後2～4kg/10a

土壌凍結地帯、冬期の積雪が浅い、根雪が遅く融雪が早く凍結する地帯には不向き

葉の黄化が始まった時期が適期

ブロードキャスタによるばらまき

ばらまかれた種子の上に大豆の落ち葉が被さり覆土のかわりとなる

生育経過

出芽が揃った様子

融雪直後

出穂期

成熟期

小麦の新たな栽培法Ⅱ

２.春まき小麦の初冬まき栽培

■**根雪直前に春まき小麦を播種し越冬させ、次の年に収穫する方法。究極の早まき技術**

積雪下で出芽し、融雪直後から生育する

■**栽培のポイント**

播種期：**11**月上旬～下旬**(**根雪前**)**　播種量：**18**～**20**㎏**/10a(**越冬後の出芽**50%**と見込んで**)**

施肥：播種時なし、融雪直後施肥**(**慣行の春まきと同量**)**

春まきより７～**10**日収穫期が早まる

播種：チゼルプラウシーダ

雪の下で発芽した種子**(2/22)**

左**:**出穂した初冬まき　右**:**未出穂の春まき

長所

・春のは種作業がないため、他作物との作業競合がない
・稈長が「春まき」より短く、倒伏の危険性が低くなる
・登熟期間が長く、千粒重が重い
・成熟期が早く、収穫時に雨にあたる確率が低い

短所

・は種適期が予測しにくい　　・は種量が多い
・は種時期が早すぎると出芽し、枯死する場合がある
・ほ場・気象条件により越冬率が不安定
・前作の雑草が繁茂する
・土壌が著しく凍結する地帯では越冬が不安定